

強者の戦略

こんにちは。先週の『源氏物語』はいかがでしたか？今回は解説編です。

次の文は、『源氏物語』宿木巻の一節である。中の君(女君)を妻としていた匂宮(宮)は、時の権力者である右大臣(右大臣)の娘との縁談を断り切れず、しぶしぶながら承諾した。その婚儀は八月十六日の夜に予定されている。これを読んで、後の問に答えよ。

右大殿には、六条院の東の御殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、「いとしも御心に入らぬことにて、いかならん」と安からず思ほして、*案内したまへば、「この夕つ方内裏より出でたまひて、*二条院になんおはしますなる」と人申す。¹思す人持たまへればと心やましけれど、今宵過ぎんも人笑へなるべければ、御子の頭中将して聞こえたまへり。

大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな

宮は、「なかなか*今なんとも見えじ、心苦し」と思して、内裏におはしけるを、*御文聞こえたまへりける、*御返りやいかがありけん、なほいとあはれに思されければ、忍びて渡りたまへりけるなりけり。らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、いとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともを月をながめておはするほどなりけり。女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、²いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなく冷ましたまふことなれば、ことに*聞きもどめぬさまに、*おほほかにもてなしておはする気色いとあはれなり。

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもいとほしければ、出でたまはんとて、「³今いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ。御後手を見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、「心憂きものは人の心なりけり」と我ながら思ひ知るる。

(『源氏物語』より)

注(*)

案内したまへば 右大臣が人を遣わして匂宮の様子を探らせなされたところ。

二条院 匂宮が中の君と共に住んでいる屋敷。

今なんとも見えじ 今今日が婚儀の日であると、中の君に知られないようにしよう。

御文 匂宮から中の君へのお手紙。

御返りやいかがありけん 中の君からのお返事はどうだろうか。語り手の推測。

聞きもどめぬさま 匂宮の縁談を気にもとめない様子。

おほほかに おっとり。

問一 傍線部(1)を、主語を明らかにして現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)(3)を現代語訳せよ。

問三 傍線部A・Bは、いずれも匂宮の気持ちを述べたものである。それぞれのよう
な気持ちか、説明せよ。

問四 波線部における中の君の心理を説明せよ。

強者の戦略

今回は光源氏の死後が舞台となっています。『源氏物語』はもちろん光源氏が主人公なのですが、光源氏が登場しないシーンもかなりたくさんあり、場面ごとの主人公を確定させて読んでいく必要がある作品です。

今回の主人公は「匂宮」。「宮」とありますから、皇族関係者であることが分かります。

（読解に差し支えが無いので書かれていませんが、光源氏の孫に当たる人物です）

○匂宮には既に愛する妻（中の君／女君）がいる

○匂宮は右大臣の娘との結婚に乗り気では無い

○婚儀は八月十六日の夜

リード文からこの情報を見落とさないように気をつけることが出来ましたか？ これらを踏まえて文章を読んでいきましょう。

ちなみに、古文常識として、当時の結婚は夫が妻のもとに通う「通い婚」で、三日連続で通えば結婚成立だった、ということも合わせて覚えておきましょう！

「右大殿には、六条院の東の御殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、」

リード文も参考にしながら現代語訳してみましよう。文法・単語で注目すべきは、格助詞「に」、それから「きこえ（終止形・「きこゆ」）です。

格助詞の「に」は、

【貴人】 + に + (は or も) > 尊敬語を含む述語

この形式を満たし、「貴人」と「述語」の間にいわゆるS・V関係が成立するとき、「尊敬」の用法「〜(様)におかれて」となります。

今回は、貴人に該当するのが「右大殿」で、「待ちきこえたまふ」が尊敬語を含む述語になっていますね。

また、古文単語「きこゆ」は動詞の下に付く場合は「〜し申し上げる」の意味となります。

以上を踏まえると、この部分は「右大殿におかれては、六条院の東の御殿を綺麗に飾り立てて、万事このうえなく準備をして待ち申し上げなさるが」となります。

右大殿が何を待っているかは理解出来ていますね？ もちろん、匂宮の来訪（もしくはは

今晚の婚儀)ですよ！

「十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、」

十六日というのは、匂宮と右大臣の娘の婚儀の日です。

もうひとつ、古文では日付と月が描かれると、どれくらいの時刻のことなのかを示すことがあります。「十五日の月」は満月ですね。満月は真夜中に南中します。十六夜の月は、それより少し遅れて南中する月です。

そんな十六日の月がだんだん空に上っていく。時刻の遅さが感じられます。右大殿は匂宮を今か今かと待っているのですが、なかなか彼はやって来ません。不安な気持ちで娘婿を待ち遠しく思っている様子が描かれています。

『「いとも御心に入らぬことにて、いかならん」と安からず思ほして、案内したまへば、」

「心に入る」は、「気に入る／気乗りする」という意味です。今回は打消の「ず」の連体形「ぬ」と一緒に使用されていますから、「気に入らない／気乗りしない」の意味になりますね。何が「気に入らない／気乗りしない」かというと、リード文に匂宮が「しぶしぶ」ながら右大殿の娘との結婚を承諾したとありますから、匂宮がこれから始まる婚儀について、気乗りしてないということですよ。

右大殿自身、匂宮が婚儀に乗り気で無いことを知っている分、不安な気持ちがあぐええません。ですから、婚儀になかなか姿を見せず、彼が何をしているのか気になって人を遣って匂宮の様子を探らせるなんてことをしてしまいました。

『「この夕つ方内裏より出でたまひて、二条院になんおはしますなる」と人申す。」

右大殿に命じられて匂宮の様子を見てきた人の報告内容は次通りです。「今日の夕方、内裏から退出なさって、二条院(匂宮と中の君が一緒に住んでいる邸)にいらつしやるようです」。

なかなかやって来ない理由は、元からの妻の所にいるから…ということだったようですね。

強者の戦略

強者の戦略

「思^{おも}す人持^もたまへればと心やましけれど、今宵^{いま}過ぎんも人笑へなるべければ、御子の頭中將して聞こえたまへり。」

傍線部(1)について、主語に注意して現代語訳をしていきましょう。

まず、「くど心やましけれど」と引用格の「と」が使用されていますから、「思^{おも}す人持^もたまへれば」と心やましけれど」とカギ括弧を付けて理解しておきましょう。

「心やまし」は「氣にくわない」という意味ですね。現在、地の文でスポットライトが当たっているのは右大殿ですから、右大殿が何かを氣にくわなく思っています。

「思^{おも}す人持^もたまへれば」というのが、彼の心中を表したものですので、これを解釈していきます。

「思^{おも}す」は尊敬の本動詞、「持^もたまへれば」は「持^もち／たまへ／れ／ば」が短くなつた形と違って下さい。何にせよ、尊敬語が使用されています。右大殿の心中文の主語は、右大殿以外の人ということですよ。

ここで氣をつけるべきは、「思^{おも}す」というのは単に何かを「お思いになる」という意味以外に、男女関係で使用された場合、「愛^{あい}しなざる」(「想^{おも}う」のイメージですね)という意味があるということです。では、「愛^{あい}していらいっしやる人をお持ち」なのは？ もちろん匂宮ですよ。

また、今回は「愛^{あい}していらいっしやる人をお持ちだから」と、中途半端に心中文が終わってしまっていますから、省略された言葉も考えておく必要があります。

右大殿が匂宮について氣にくわなく思っているのは、既に愛する妻が居て、自分の娘とすんなり結婚してくれないからです。

ですので、この傍線部は「『匂宮は愛^{あい}していらいっしやる人をお持ちだから、婚儀に乗り氣でないのだ』と、右大殿は氣にくわないけれど」と解釈しましょう。

…かといって、ここで意地を張って破談にしてみましたも、世間から笑われてしまうでしょうから(権力者の娘の結婚というのは、多くの人が知っているところでした)、右大殿は息子である頭中將に命じて、和歌を匂宮に送りました。

「大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎ見えぬ君かな」

歌の大意は「大空の月でさえ宿る私の邸に、お待ち申しております宵が過ぎてもおいでにならないあなたですね(訪問がなく恨めしいです)「くらいでしようか。

和歌というのは、それまでの状況を踏まえて解釈すればそこまで怖い物ではありません

強者の戦略

ん！

「宮は、『なかなか今なんとも見えじ、心苦し』と思して、内裏におはしけるを、御文聞こえたまへりける、御返りやいかがありけん、なほいとあはれに思されければ、忍びて渡りたまへりけるなりけり。」

さて、地の文でスポットライトが当たるのが匂宮に移りました。和歌を送った右大殿側から、和歌を送られた匂宮側へ。このあたりの変化に敏感になっておきましょう。

この部分は、注釈を手がかりに大意を掴んでおけば良いでしょう。

匂宮は、「中途半端に、今日が婚儀の日であると中の君に知られないようにしよう、気の毒なことだ」とお思いになって内裏に参内していました。そこから中の君に手紙を書き、それに対する中の君からのお返事がどのようなであったのか、匂宮はやはり心を動かされてしまい、中の君のいる二条院にこっそり行ってしまう、というのが事の真相であったようです。

「らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、A いとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともに月をながめておはするほどなりけり。」

傍線部A「いとほし」を詳しく説明していく必要があります。

「いとほし」は「かわいそうだ／気の毒だ／不憫だ」、また「かわいらしい」という意味がある、頻出古文単語ですね！ここでは、「慰めて」とありますから、「かわいそうだ」の意味で考えましょう。

また、傍線部の直前にある「らうたげなり」は「可愛らしい様子」を表します。つまり、この部分は「可愛らしい様子を見捨てて出かけよう」という気持ちもせず、かわいそうなので」とあります。主語を補うことは出来ますか？

スポットライトが匂宮側に移っているというのがポイントですよ！

見捨てるのがかわいそうに思うほど可愛らしくのは、匂宮の妻である「中の君」。出かけようとするのは「匂宮」ですよ。出かける先は、婚儀が行われる右大殿の邸です。傍線部Aは、匂宮が、可愛らしい中の君を見捨てて右大殿邸へ婚儀へ出かけることをいたわしく思っている、ということですね！

いろいろと慰めて、一緒に月を眺めていた時に、頭中将から例の和歌が届いたということです。

強者の戦略

「女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなく冷ましたまふことなれば、ことに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはする気色いとあはれなり。」

傍線部の現代語訳がきました。大きなポイントとなるのは、

○「いかでくじ」：なんとかしてく(す)まい

○「念ず」：我慢する／祈る

○「つつ」：くはく(反復)／くし続けて(継続)／くながら(並行)

○「つれなし」：冷淡だ／そしらぬ顔だ・さりげない／平気だ

の四つでしょうか。

とくに、「いかでくじ」は、「いかでく意志・願望の語句」の打消バージョンとなりますので、この構造に気づけることが大切です。

「念ず」は「我慢する」と「祈る」の意味がありますが、自分の思いを顔色に出すまいと仏様にお祈りするとは考えにくいですから、「我慢する」の意味を採用しましょう。

「つつ」は、反復もしくは継続で訳出すれば良いでしょう。

「つれなし」は、「さりげない」という意味でとりましょう。もしも「冷淡だ」としてしまうと、匂宮が一生懸命慰めている中の君のキャラクターがガラツと変わってしまいますよね。中の君は、匂宮の縁談に対して、さりげない風を装って、自分の気持ちを冷ましていくということです。なおさらいじらしく感じますね。

「中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれも、いとほしければ、出でたまはんとて、」

もう一度、匂宮の心情を問う傍線部が出てきました。

中将(頭中将)が参上なさったのを聞きなさって、そう(中の君を置いて出かけるのは可哀想だ)はいうものの、やはり「かれ」も気の毒だと思い、右大殿邸に出かけようとするシーンですね。

「かれ」というのは、英語でいうHeも指しますが、広く遠くにあるものを指すことも出来る言葉です。ここでは、自分が訪問しないことで気を揉んでいる右大殿邸の人々全般を指すと理解してもらった方が無難でしょう。

ですので、ここは「中の君が気の毒で婚儀にも気乗りがしないとはいえ、さすがにいつ

強者の戦略

までも訪問しないのは右大殿方の人々が気の毒だということ」と答えると良いでしょう。

『⁽³⁾今いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し』と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寢殿へ渡りたまふ。」

傍線部について、分かりやすい文法・単語から片付けていくと、「な〜そ」で、「〜してくれるな」。「心そらなり」は「上の空である」「落ち着かない」です。(ここでは、直前の「月」と「そら」の縁語的な表現になっています)

そして、「参り来」の訳出に注意して下さい。「参上する」「伺う」ですが、どこに「参上する」というのでしょうか？

今までの流れから考えて、実際に匂宮がこの直後に向かうのは右大殿の邸でしょう。しかし、ちよつと考えて下さい。大好きな妻に対して、「今すぐ右大殿の邸に参上するつもりだからね。一人で月を見ちやだめだよ。僕は向こうの邸に行つたつて上の空だから、辛いんだよ」なんて言うでしょうか？ 大好きな妻と一旦離れる時に言う台詞としては、「今すぐ出かけるからね」よりも、「すぐに帰ってくるからね」の方がふさわしいですよね？ (ここは、「近いうちに、すぐ帰つて参りましょう。一人で月を御覧になります。あなたと離れると落ち着かないので、辛いのです」と考えて下さい。

そう言い残しはするものの、やはり妻を残して出て行くのは心苦しいので、中の君に見えない場所から寢殿に移動し、出発の準備に当たりました。

「御後手を見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、心憂きものは人の心なりけり」と我ながら思ひ知らる。」

波線部の中の君の心理を説明する問題です。別の女性の所へ向かうために去っていく匂宮の後ろ姿(御後手)を見送るときの気持ちです。ストレートに心情が表現されている箇所としては、「枕の浮きぬべき心地すれば」がありますね。この「枕浮く」という表現、学校の教科書にもよく掲載されている『源氏物語』の「須磨」の巻にも同様の表現があります。(波ただこもに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、まくらうくばかりになりけり) 枕がプカプカ浮くくらい、寢床に涙がたまってしまう様子を表したものです。

直前の「ともかくも思はねど(なんとも思わないけれど)」と矛盾してしまうように見えますが、匂宮が婚儀にゆくことに対して、酷いとか薄情だとかは思わないけれど、枕

が浮いてしまうくらい涙が流れて悲しい気持ちがある、ということ。そして、本当は平然としていたのに、どうしようもなく涙がこぼれるほど悲しみを感じている自分の心に対して、「心憂きものは人の心なりけり(情けないのは人の心であるよ)」と思っていることから、コントロールできない自分の心を嘆いている中の君の様子も読み取れると思います。

【解答】

問一 匂宮は愛していらつしやる人をお持ちだから、娘との婚儀に乗り気でないのだと、右大殿は気に入くないけれど、

問二 (2) なんとかして顔色に出すまいと堪え忍び堪え忍び、平然とした様子で自分の心を静めなさることなので、

(3) 近いうちに、すぐ帰って参りましょう。一人で月を御覧になりますな。あなたと離れると私の心も落ち着かないので辛いのです。

問三 Aは、可愛らしい中の君を見捨てて右大殿邸へ婚儀へ出かけることをいたわしく思っている気持ち。Bは、中の君が気の毒で婚儀にも気乗りがしないとはいえ、さすがにいつまでも訪問しないのは右大殿方の人々が気の毒だという気持ち。

問四 匂宮が婚儀にゆくことに対して、恨んだり嫉妬したりという気持ちは起こらないが、枕が浮いてしまうくらい涙が流れて悲しい気持ちになってしまい、「情けないのは人の心であるよ」と、思い通りにならない自分の心を持てあましている。